

『今月の天候と農作業』

通巻第5695号
1月号
令和7年1月9日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

特になし

【予報のポイント】

1週目は寒気の影響を受けやすいため気温が低いですが、2週目は寒気の影響を受けにくい
ため平年並か高いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、ほぼ平年並の見込みです。降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

<1週目の予報> 1月11(土)～ 1月17日(金)

東シナ海側では、寒気の影響で雲が広がりやすいでしょう。太平洋側では、晴れの日が多いでしょう。

<2週目の予報> 1月18(土)～ 1月24日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 1月25日(土)～ 2月7日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 スクミリングガイ対策

スクミリングガイ（ジャンボタニシ）対策のために厳寒期の耕うんを実施しましょう。トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を上げると、殺貝効果が高まります。

2 種子の選別と消毒

健苗育成のために、塩水選と種子消毒を行きましょう。

種子消毒は、薬剤が袋の中心部まで十分に届くようにしましょう。籾に気泡が付いていると効果が低下するため、袋を揺すり気泡をよく抜きます。また、薬液の水温が、10℃以下とならないように温度管理に注意しましょう。

3 浸種と催芽

浸種の際の水量は、種子籾の2倍以上とし、浸種日数は水温が10℃の場合では10日間、15℃の場合では7日間程度とします。浸種後は、30～32℃で24時間、芽が1mm程度出た状態まで催芽を行います。

◆ムギ類

1 麦踏みと追肥

麦踏みは耐寒性を高め、分けつの増加や稈の伸びすぎを抑える効果があります。節間が伸び始める2月中旬までに2～3回実施しましょう。降霜後など土壌や株の水分が多い状態での作業を避け、土壌や株が乾燥した状態で作業を行きましょう。

分けつ肥は1月中旬に窒素成分で10a当たり2.5kg程度を施用し、条播きの場合は土入れを行います。

（福川 泰陽）

施設野菜

◆きゅうり

摘心栽培では、草勢が低下すると不良果が発生するため早めに摘果を行います。ま

た、採光と風通しを良くするため、生長点を2、3本確保しながら、黄化葉や発病葉、混み合った葉等を中心に摘葉します。

つる下ろし栽培では、日照不足や低温等の影響により、芯止まりが発生しやすい時期です。生長点の状態を確認しながら、草勢が弱い場合には3節に1果程度を摘果し、着果負担を軽減します。

◆ピーマン

促成栽培では、着果量が多いと草勢が低下します。かん水量をやや多くし、夜温を通常より高めに管理して、果実の肥大を早めるとともに、収穫間隔を短くすることで草勢を維持しましょう。また、多湿状態では病害が発生しやすくなるため、日中のこまめな換気による湿度管理を行いましょう。

◆トマト

特に光を必要とする品目であるため、日中は内張カーテンを開け、光の確保に努めます。果実肥大や着色促進、食味向上のためには、玉出しを徹底しながら、過度の摘葉は避けます。

◆いちご

食味の低下や小玉化を防止するため、午前中は25～28℃を目安に温度管理を行い、開花から45日程度で収穫できるようにします。また、1果房当たり10果前後になるよう裾玉を摘果します。

追肥は液肥を主体とし、窒素成分で10α・ひと月当たり2～3kgを施用することを基本とし、生育を見ながら、かん水量と併せて調整します。

草勢の低下や乾燥した状態はうどんこ病の発生を助長するため、定期的な予防散布を行いましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

ハウス栽培やトンネル栽培では、播種や定植の作業が遅れないように、準備を早めに行いましょう。

◆食用かんしょ

トンネル栽培の育苗時期です。苗の定植60日前を目安に種芋を伏せ込みます。種芋は水洗いをした後に、なり首と尾部を切除し、薬剤で消毒します。種芋を伏せ込んだら、夜間の保温に努めて萌芽を促し、萌芽したら、日中は25℃を目安に換気しま

す。苗を定植する10日前を目安に換気を始めます。特に暖かい日中は積極的に換気をして、外気に慣らしましょう。

◆ばれいしょ

下旬から不織布による被覆栽培の定植期です。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗のため、植物防疫検査印のある種芋を用いましょう。種芋は30g程度の芋が適しています。大きい芋は生長点から基部に向けて縦割りし、日陰で風乾してから使用しましょう。

◆ごぼう

9、10月播種分の収穫期です。収穫開始時期の目安は、マルチ栽培では播種後130日、トンネル栽培では100日程度です。

◆スイートコーン

ハウス、ミニハウスでは中旬から、大型トンネルでは下旬から播種適期になります。地温が低いと発芽不良となるため、播種の1週間前までにはトンネル被覆を行いましょう。

(中村 剛)

果樹

◆完熟きんかん

1月中旬から完熟きんかんの出荷が始まります。収穫開始は、着色状況や糖度を基に判断します。収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐため、昼間の気温は15℃を目安に管理します。

また、裂皮を防止するため、早朝の換気等により施設内の湿度を低く維持します。果実は、打ち身や圧迫で傷害を受けやすいため、丁寧に扱きましょう。

◆マンゴー

開花期に湿度が高くと、花穂に軸腐病や灰色かび病が発生し、その後の果実品質が低下します。早朝の換気・除湿や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ちましょう。また病害対策として、微生物資材を加温用ダクト内に投入し、送風する方法があります。普及センターやJAに相談してください。

幼果期以降も早朝のハウス内湿度を低く保つことはあざ果の発生抑制にもつながります。今後、厳寒期を迎えるとハウスの密閉時間が長くなるため除湿対策に留意しま

しょう。

これから出蕾を迎える園では花芽の状況を確認しながら、焦らず徐々に温度を上げ、充実した花を確保しましょう。

2 果樹全般

◆寒害の事前対策

園地に冷気が停滞するのを防ぐため、防風林のすそ枝は地上1mくらいまで剪除します。株が密集した防風林では、防風樹の間伐を実施します。

土壌乾燥が激しい場合には寒害を受けやすくなります。日中の温度が高い時間帯に定期的にかん水を行います。また、苗木は耐寒性が弱いため、枝を束ねて全体をわらで覆うなど、防寒対策を実施しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆電照ギク

1、2月に消灯する作型では、花芽分化時の温度が最も低くなります。夜温を十分に確保するため、加温機の設定温度を確認しましょう。栄養成長期間中に低温に遭遇した場合は、開花の遅延防止のため消灯の1、2週間前から夜温15℃で予備加温を行います。

また、消灯後の夜温の変温管理を行うなど、暖房コスト削減に努めましょう。

◆スイートピー

日射量が12月下旬から増えてくるため、植物体の蒸散も徐々に活発になります。

かん水が遅れると2月以降の草勢低下につながるため、天候と草勢を見ながらかん水頻度を徐々に増やし、適宜追肥を行いましょう

◆デルフィニウム

沿海地域のエラータム系では2番花以降の花穂が急速に抽だい・伸長します。ハウス内の採光をしっかりと確保し、カルシウム剤を適宜施用することで、茎の硬化とボリウム確保につながります。

◆ラナンキュラス

日中は、採光のため内ビニルの開閉をしっかりと行います。なお、日中にハウス内の温度が低すぎると、光合成速度の低下により萌芽や芽の伸長が遅くなり収量に影響す

るため、15℃を目標に管理しましょう。

また、収穫が続くと草勢が低下しやすくなるため、定期的に液肥を施用して草勢の維持を図りましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

令和6年12月20日現在、全国11道県において、宮崎県の1例を含む15例の鳥インフルエンザが発生しています。また、飛来する野鳥や環境試料(水)からもウイルスが確認されており、依然として養鶏場への侵入リスクが高い状況が続いています。農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

今月は年間で最も寒く乾燥する時期であると同時に、寒さ対で畜舎を閉め切るため、舎内が換気不足になりやすい時期でもあります。換気不足は呼吸器病発生の原因となるため、気温が上がる日中には畜舎のカーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回すなど、十分に換気を行いましょ。また、乾燥する時期は埃や塵が多く、呼吸器病の原因となりやすいため、細霧器等を使用して湿度を適度に保ち、畜舎内が乾燥しすぎないように留意しましょ。幼畜の寝床は常にきれいな状態を保ち、床面が露出しないようにおがくず等を厚めに敷くなど腹冷え対策を実施するとともに、保温箱やコンパネによる風よけの設置、コルツヒーターや赤外線ヒーターなどの効果の高い保温器具を使用し、保温に努めましょ。

(小田 弥生)

特用作物

1 寒さ対策

寒風や急激な気温低下により、幼木園や中切り園では、成葉の寒害や幹割れ(裂傷型凍害)等の発生が懸念されます。被害を受け易い茶園では、防風ネットの設置や土寄せ等の対策を行いましょ。

また、山間地で積雪による枝折れや裂傷が発生した際には、被害程度が明らかになる融雪を待って、事後対策を行いましょう。

2 定植ほ場の植付け準備

今月は定植の準備を行う最終時期です。

茶は定植して摘採するまで4、5年かかり、一度植付けると植替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の微気象や茶の特性を把握した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶は湿害に弱いため、茶園の土壌には排水性が良く、作土層が深いことが求められます。地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は避けましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場や水が流入するようなほ場は、事前の対策として、天地しによる混層や明渠・暗渠等の排水対策を行いましょう。

また、アルカリ性の土壌や改植する茶園では土壌pHの調整と堆肥施用による地力増強を図りましょう。さらに、線虫被害が懸念されるほ場では、早めの土壌消毒を行いましょう。

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌作業は、玉切りした原木が乾きすぎないうちに、できるだけ早めに行います。

植菌後の原木は、菌糸の活着と伸長を促進するため「仮伏せ」を行います。原木は地際から60cm以下の高さに横積みして、ほだ木の上面と周囲を笠木や遮光ネット等で被覆し、保温と保湿を図ります。また、日当たりと排水の良い場所を選定し、風通しが悪くならないよう注意が必要です。

2 寒子づくり

寒子は冬の寒い時期に発生収穫したものを言い、肉厚のしいたけ生産が可能です。防風垣の設置などほだ場の湿度の保持、袋かけやビニール被覆による保温・保湿に努め、しいたけの成長を促す必要があります。

また、品種毎の発生温度等を考慮し適正な時期に散水等の発生操作を実施することで、ほだ木に必要な水分を与え、発生を促します。

3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄（冬菇・香菇・香信）で収穫するよう適期に採取するほか、日和子での収穫に努めます。

関連情報

◆農作業安全

農作業死亡事故の多くは機械作業時に発生しています。

機械作業の事故ではオペレーターの不注意や作業ミスに加えて、農業機械の故障や整備不良も原因の一つです。

このため、作業終了後には、機械の点検やメンテナンスをこまめに行うことで事故防止に努めましょう。

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後に、散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

◆堆肥による化学肥料の削減

堆肥には、土壌改良材としての効果の他、肥料としての効果があります。

県が作成した堆肥利用に役立つ次の2つのツールを活用し堆肥を上手に使うことで、化学肥料の使用量低減、生産コスト削減に努めるとともに、環境に配慮した持続可能な農業に取り組みましょう。

「みやざきの堆肥検索サイト」

生産地や畜種、荷姿等から条件を絞って、県内の堆肥を検索できるサイトです。現在80事業者が登録しています。

「堆肥施用量計算カルテ」

化学肥料の代わりに堆肥を施用する量を計算できるサイトです。使う堆肥の種類を選択し、作物の施肥基準値を入力すれば自動計算されます。

(<https://miyazakitaihi.com/>)

(農業普及技術課)

内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害一般	—	施設内が多湿になると、病害の発生が多くなるため、適宜換気等を行い施設内の適切な温湿度管理に努めます。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病	並 並 並 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病害は高温、多湿条件下で発生しやすいため、適正な温度・水管理に努めます。いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発病を確認したら初期防除を徹底します。
	黄化えそ病(MYSV) ミナミキイロアザミウマ	やや少 並	キュウリ黄化えそ病の発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分します。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	タバココナジラミ	多	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するため、施設内で増殖しないよう早期発見、早期防除に努めます。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後に蒸し込みを行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 菌核病 黒枯病	多 やや少 並 並	斑点病の発生が多くなっています。多湿条件で発生しやすく、発病後の防除が困難なため、暖房、送風、換気等により、施設内の湿度を低く保ちます。また、罹病葉を発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出し処分します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ※ タバココナジラミ	並 やや多 並	ヒラズハナアザミウマの発生が多くなっています。花数が減少する時期が防除適期となるため、この時期を逃さずに、花にしっかり薬液が付着するよう防除します。 タバココナジラミの発生が多くなっています。黄色粘着板を設置し、早期発見、早期防除に努めます。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 すすかび病	並 並 多	すすかび病の発生が多くなっています。 いずれの病害も多湿条件で発生しやすいため過繁茂にならないよう管理を行うとともに、ハウスの換気を良くします。 また、病勢が進展してからでは防除効果が低くなるため、発病を確認したら早めに防除します。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバココナジラミ※	多 多	TYLCV および、媒介虫であるタバココナジラミ発生が多くなっています。タバココナジラミの早期発見に努め、低密度のうちに防除します。TYLCV の発病株を発見した場合は、必ず株全体を抜きビニル袋に入れて枯れるまで密閉するなどして、適切に処分します。
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	並 並	いずれの病害も、予防に重点をおくとともに、罹病した葉と果実は伝染源となるため速やかに除去しほ場外に持ち出し処分します。
	ハダニ類 アブラムシ類 ヒラズハナアザミウマ	並 並 並	ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるため、低密度時に防除を徹底します。 ヒラズハナアザミウマは、花や果実に寄生し、食害により果実品質が低下するため、低密度での防除に努めます。
1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。 2) ※は病害虫発生予察注意報を發表中です。 3) 病害虫防除肥料検査センターの HP アドレスは、QR コードより閲覧してください。			